共同研究2019

研究紀要リーフレット

vol.48

〔研究テーマ〕

一人一人が未来の創り手となる豊かな学びの創造

【３年次】

熊本県立教育センター

〔研究テーマ〕

一人一人が未来の創り手

共同研究の内容について

変化が激しく予測が困難なこれからの時代では，一人一人が未来の創り手となって，豊かな未来（持続可能な社会や一人一人の豊かな人生）を実現していくことが必要になります。熊本県立教育センターでは，そのために必要な，児童生徒の豊かな未来につながる学びを「豊かな学び」として，研究を行っています。

1　本教育センターでは，研究の１～２年次において，児童生徒の「豊かな学び」の実現に向け，研究協力校，研究協力員と協力して，学校経営や教科等横断的な資質・能力の育成，各教科等の資質・能力の育成について研究を行ってきました。

３年次に当たる本年度は，これまでの研究を踏まえ，**豊かな学びを実現させるための学校全体の取組**について，カリキュラム・マネジメントの考え方に基づいた研究を行いました。

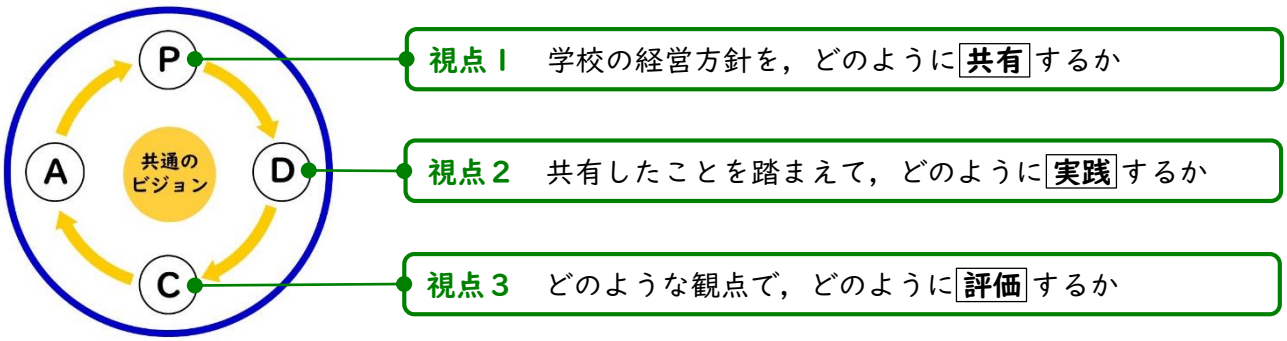
2　カリキュラム・マネジメントについて，小学校学習指導要領（平成29年告示）には次のように書かれています。

> 各学校においては，児童や学校，地域の実態を適切に把握し，**教育の目的や目標の実現**に必要な①教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと，②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと，③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。
>
> 【文中の（　）内，太字，番号，下線等は筆者による】

ここには，「教育の目的や目標の実現」のための３つの側面が示されています。

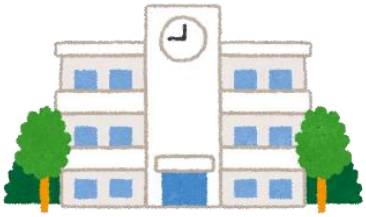
本教育センターでは，学校で取り組むカリキュラム・マネジメントの最初の一歩として，「②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと」（いわゆるＰＤＣＡサイクルの確立）に注目しました。ＰＤＣＡサイクルをどのように工夫すれば，より効果的・効率的に「豊かな学びを実現させる学校」を実現できるのか，研究協力校と共同研究を行いました。

3　実際にＰＤＣＡサイクルを工夫する際の主な視点を，次の３点に絞り込みました。



「学校のＰＤＣＡサイクル」のイメージ図

4　各研究協力校における共同研究は，各学校の自律的な取組について，本教育センターが補助的に関わる形で進めていきました。各研究協力校のニーズに応えながら，「各学校の経営方針の具現化」につながる取組を提案しました。



となる豊かな学びの創造〔３年次〕

学校全体で「豊かな学び」を実現するために

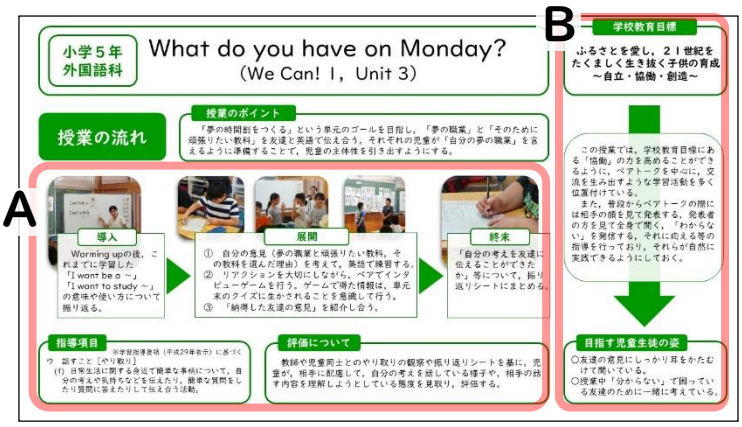
視点１　学校の経営方針を，どのように**共有**するか

5　まず，校長の描く経営方針を踏まえたワークショップ等を行い，職員間で「方針の共有」ができるようにしました。小中学校においては，各学校の教育目標の実現につながる「育てたい力」，高等学校においては「主体的・対話的で深い学びの実現」について協議し，ビジョンを共有しました。そして，その視点を様々な教育活動に生かしていくことができるようにしました。

視点２　共有したことを踏まえて，どのように**実践**するか

6　共有したことを踏まえて，授業改善や生徒会活動，プロジェクト活動等に取り組みました。

まず，授業改善の取組については，**実践シート**（右）を活用し，各教科等の資質・能力の育成（**A**の部分）と同時に，小中学校においては各学校の教育目標の実現につながる「育てたい力」の育成を，高等学校においては「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づく授業改善の視点（いずれも**B**の部分）を，それぞれ位置付けた実践を行いました。



実践シート

各教科の実践シートは
本教育センターＨＰに掲載

7　生徒会活動においては，生徒会執行部が中心となって「育てたい力」について考え，生徒間で共有できるように具体化し，生徒集会で発表しました。（左：写真）「育てたい力」について，教師と生徒が目標を共有して取り組むことで，「学校の教育目標の実現」に近づくようにしました。

総合的な学習の時間や特別活動等において取り組んだプロジェクト活動では，「どのように活動するか」だけでなく，「その活動が，学校の教育目標の実現につながるどのような力の育成につながるのか」という観点で活動を工夫しました。

視点３　どのような観点で，どのように**評価**するか

8　教育課程について，小中学校においては，「学校の教育目標の実現に近づいたか」「育てたい力は高まったか」など，全職員が「育てたい力」を共有し意識しながら実践・評価することで，教育目標の実現に向けての方向性がさらに定まり，授業等を中心とした様々な教育活動が「学校の教育目標の実現」につながると考えました。高等学校においては，「主体的・対話的で深い学びが実現できていたか」という観点を職員間で共有し，教科の授業づくりの充実を目指した取組の継続を図ることで，授業改善につなげていきました。

研究協力校における取組

小学校

○　学級担任制である小学校では，「学級」という単位を意識して教育活動を進めていくことが多いため，各学校の教育目標を日常的に意識することは難しいという状況があります。

○　各学校においては，学級経営も校務分掌も教育目標の実現につながるように計画され，実施されています。そのつながりをより明確にするためは「教育評価の工夫」が重要です。授業等の評価や，行事そのものの活動評価，学期末の評価等の関連を見直すことで，より効果的にカリキュラム・マネジメントを進めることができます。

大津南小学校の取組

教育目標の実現に向けた「学び合う力」「自分で考え取り組む力」「共感する力」を高めるための取組

大津南小学校では，「育てたい力」について「どの場面で，どのような力を付けるのか，また，どのような手立てを行えば，その力が育つのか」を意識した授業づくりを行いました。指導案の指導上の留意点に，「育てたい力」を育成するための具体的な指導の視点を位置付け，授業研究会では，授業内容の検証とともに，その視点をあえて取り出して評価を行いました。このような取組を継続することで，「育てたい力」を意識した授業づくりへの転換を図ることができるようになってきています。
（右は「育てたい力」に基づいて授業を評価するためのシート）

No.	視点（手立て⇒求める児童の姿）	育てたい力	評価
①	話し合いの場面で、少人数（3人）のグループを形成したことで、グループ全員が自分の考えを表現する姿が見られた。	学び合う力	
②	グループ学習を行ったことで、ほかの友達の意見を聞き、自分の考えと比べて共感したり疑問を出し合ったりする姿が見られた。	学び合う力	
③	動作化の場面で、『そうしたわけ』を聞いたことで、言語を理解したり具体的にイメージしたりする姿が見られた。	学び合う力	
④	視点を明確にして「振り返り」を行ったことで、児童は何を学んだかを実感する姿が見られた。 友達の意見や考えに、必ず反応することを徹底したことで、他	自分で考え取り組む力	

「育てたい力」育成のための指導の視点

御船小学校の取組

教育目標の実現につながる資質・能力としての「自立」「協働」「創造」の力を高めるための取組

御船小学校では，各教科等の授業の充実を図りつつ，教育目標の実現につながる授業を工夫しました。研究授業では，「育てたい力が発揮されている児童の姿」を撮影し，それらを授業研究会で紹介し共有することで，「学校の教育目標の実現につながる授業」をイメージすることができるようになってきました。

また，児童が「自分たちが御船町のためにできること」を考えて学校運営協議会で提案し，委員の方の意見を生かして実行する「プロジェクト活動」についても，「活動を通して学校の教育目標の実現につながるどのような力が高まるか」という観点で活動を工夫しました。

中学校

○　教科担任制である中学校では，教師は各教科等の資質・能力の育成を意識することが容易であるのに対して，「学校の教育目標の実現」についての意識をもちにくい傾向があります。

○　学校における様々な学びの中で，教育目標の実現につながる「育てたい力」の育成を意識することで，より効果的・効率的に教育目標を実現できるだけでなく，「育てたい力」の高まりが授業の改善につながり，各教科等の資質・能力の育成にもつながると考えられます。

荒尾第四中学校の取組

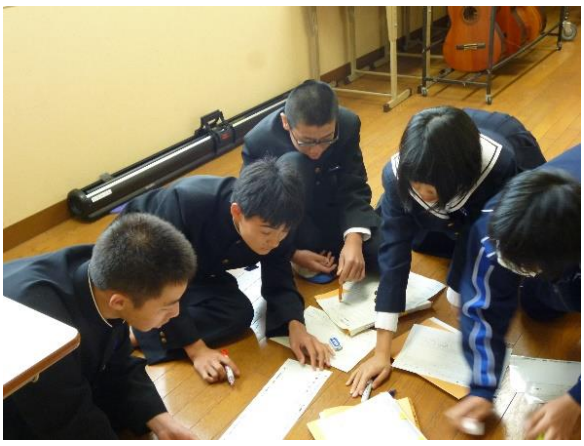
教育目標の実現に向けた「見通す力」「粘り強く行動する力」「思い合う力」を高めるための取組

荒尾第四中学校では，職員ワークショップを通じて，生徒に身に付けさせたい資質・能力について話し合い，「見通す力」「粘り強く行動する力」「思い合う力」の三つに焦点化しました。授業では，各教科等の資質・能力の育成を目指しつつ，これらの三つの力の育成を意識した授業づくりを行いました。

また，生徒会活動においては，生徒会執行部が中心となって「育てたい力」について考えて生徒間で共有できるように具体化し，生徒集会で発表しました。その後に行われた新生徒会の立会演説会では，「育てたい力」に基づいた演説が行われ，教師と生徒が思いを共有し，学校全体で教育目標の実現に近づく動きが見られました。

有明中学校の取組

教育目標の実現に向けた「自他を大切にする力」「社会に貢献する力」「将来を展望する力」等を高めるための取組



有明中学校では，学力向上に向けて各教科等の授業改善に取り組み，研究授業後の授業研究会等では具体的で活発な議論が行われています。本年度は，各教科等の資質・能力の育成を目指しつつ，教育目標の実現に向けた「育てたい力」の育成を意識した授業づくりを行いました。研究授業では，「育てたい力が発揮されている生徒の姿」を撮影し，それらを授業研究会で紹介し合うことで，「教育目標の実現につながる授業」について意識を共有することができるようになってきました。

また，授業づくりの段階において，テレビ会議システムを有効に活用して本教育センターと情報交換を行い，各教科等の資質・能力の育成につなげることができました。

高等学校

○　高等学校では，「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づいた授業改善の必要性が叫ばれていますが，以下のような課題が見られます。

①授業改善に対する教師の意識や取組に個人差があり，校内での授業実践の共有や，組織的な取組が十分でない状況が見られること

②教科会や職員研修等において授業改善の組織的な取組のために必要な話合いをしたり，探究型の授業を設定したりする，十分な時間を確保するのが難しいこと

鹿本高等学校の取組

学校全体で「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善のための取組

鹿本高等学校では，豊かな未来を実現できる生徒を育成していくために，学校全体で「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善に取り組みました。

まず，全職員による２回の全体研修を行いました。１回目は「主体的・対話的で深い学び」とは何か，なぜ必要なのか等について模擬授業等を通じて確認しました。そして，２回目は自分たちの授業を「主体的・対話的で深い学び」の視点で振り返り，お互いの取組について紹介し合う研修を行いました。

その後，「主体的・対話的で深い学び」の視点を用いて各教科で授業改善に取り組みました。各教科会において，検証授業の前後に，目指す生徒像等について意見を出し合ったり，検証授業の単元や計画を立案したり，「主体的・対話的で深い学び」や生徒の変容を視点にした授業研究会を実施したりしました。

各教科の授業（一部）

国語科

【１年・国語探究】

日本文化における「他者を装う」ことについて，「土佐日記」を中心に，様々な作品や事象，論考を通して総合的に考察し，自分の意見をまとめました。

数学科

【１年・数学Ⅰ】

生徒が，これまで数学で学んだことを使って，学校にある「段差」について考えました。実際に測定した上で，最適なスロープを考案し，発表しました。

家庭科

【１年・家庭基礎】

主体的な課題解決のために，ジグソー法的手法を取り入れました。様々な資料等を活用し，その内容やそれぞれの意見について交流する活動を行いました。

課題研究

○　テーマ研究に加えて，学習指導要領改訂のキーワードとなる内容について，教育現場の課題に応える研究を行いました。

情報教育

来年度より，小学校においてプログラミング教育が必修化されますが，不安に思われる先生方も多く見られます。プログラミング教育の推進には，各教科等でどのような授業ができるのか情報提供することが重要だと考えます。

今年度，図画工作科ではビジュアル型プログラミング言語を，算数科と社会科ではロボット型教材を使った授業を行いました。また音楽科では，コンピュータを用いないプログラミング教育を行いました。

授業実践は，授業展開や授業動画として整理し，本教育センターHP内に掲載しました。

特別支援教育

今日，特別支援教育において「自立活動」の重要性が高まっていますが，どのように自立活動の指導を進めればよいのか，具体的なイメージがもちにくいという声が聞かれます。

今年度は，中学校特別支援学級における事例を通して，自立活動の目標設定及び実践・評価・改善の工夫について整理しました。その際，生徒が自らの学びを実感できる「学習シート」や，教師が毎時間の授業改善に生かせる「授業づくりメモ」の活用を試みました。

また，特別支援学級担任等の専門性向上を目指し，実践レポートや校内研修プランの動画コンテンツを作成し，公開しました。

産業教育

八代東高等学校の新設学科である情報ネットワーク科と協力して，地域産業をはじめ高度情報化社会の発展を担うスペシャリストとして求められる資質・能力の育成を目指した研究を行いました。「課題解決型の授業づくり」「Ｗｅｂプログラミングの体験」「専門スキルの向上」の三つの取組を行い，これからの商業科におけるプログラミング教育の方向性について研究しました。

特に授業づくりにおいては，知識や課題解決に必要な情報を収集し，粘り強く課題解決に取り組む活動を取り入れ，新たな課題に対応できる力を育みました。

共同研究のまとめ

各学校との共同研究を通して，次のような成果とこれからの課題が見えてきました。

視点１　学校の経営方針を，どのように**共有**するか

ワークショップ等を通じて学校の経営方針（教育目標の実現，授業改善）について話し合う場を設けることで，経営方針を「自分事」として捉えることができるようになりました。また，共有したイメージを「育てたい力」「主体的・対話的で深い学び」のようなキーワードで整理することで，その後の活動に生かしていくことができるようになりました。

実践を通して，多忙な学校現場においてワークショップ等の時間を設定することの難しさを実感しました。話合いを，いつ，どのような方法で行うのかを明確にし，年間の教育活動の中に効果的に位置付けておくことが必要だと感じました。

教科の教員同士が，科目を超えて，育てたい生徒の姿を共有しながら積極的に授業づくりに取り組むことができました。　（鹿本高等学校）

全職員で学校教育目標の具現化に向けた「求める児童の姿」について共有できたことはよかったと思います。どの教科の授業を組み立てる時にもその姿を共有することができたし，目の前の子供たちにはどの力が必要なのかを図る指標にすることができると思いました。　（大津南小学校）

視点２　共有したことを踏まえて，どのように**実践**するか

共有したことを踏まえて実践することで，目指してきた「教育目標の実現」「主体的・対話的で深い学びの実現」等のカリキュラム・マネジメントの推進へとつながることを実感できました。これまで点（個々の取組）であったそれぞれの実践が線（教科間・学年間の協力）となり，面（協働して取り組む組織）となりつつあります。また，本研究では，新しい取組を考えるだけでなく，これまで行ってきた取組に価値を見出すこともできました。

今後は，実践の継続と深化のために，常にＰＤＣＡサイクルを意識して取り組むことが重要であると考えます。

教師の言葉かけなど，日常の何気ない活動の中でも，（育てたい力の一つである）「思い合う力」というのは意識させることができると感じました。（荒尾第四中学校）

「指導の方向をそろえる」ことの大切さを学びました。それぞれ異なる指導をするよりはるかに効果的であり，目標達成も早くなると感じました。　（有明中学校）

視点３　どのような観点で，どのように**評価**するか

視点１で共有したことを，評価の指標として職員間で共有することで，教育活動をシンプルな形で評価したり，教科等の枠を越えて検討したりすることができるようになりました。また，共有したことを，学校で行われる様々な評価（学校評価，学期の評価，授業評価等）の中に共通部分として位置付けることで，共有したことをより一層意識できるようになりました。

どの活動でも「育てたい力」を意識することは，授業，行事，その他の活動の全てに共通事項が生まれ，評価するときにシンプルになったと思います。　（御船小学校）

共同研究を振り返って

共同研究を通じて，「豊かな学び」の実現のためには，一人一人の教師の授業力や専門性の向上だけでなく，学校全体が，一つの目標に向かって協力する「チーム学校」の実現が重要であることが見えてきました。目指す方向性を焦点化し，具体化してＰＤＣＡサイクルを確立・運用することで，より効果的・効率的に「教育内容の組織的配列」や「内外資源の活用」を行うことができるようになり，学校の経営方針の下，学校全体で「豊かな学び」を実現することができます。